

関東北部に存するドイツ関連史跡の総合的検討

小 原 淳

要 旨

日本には多数のドイツ史関連史跡が存在する。筆者は既に 1000 以上のそうした史跡——景勝地、建造物、博物館、資料館、コレクション、記念碑等——を確認している。本論文では、関東北部（群馬県、栃木県、茨城県、埼玉県）に存する 8 つの史跡を取り上げ、その歴史的背景を論じる。

(1) では、建築家ブルーノ・タウトが住んだ高崎市の洗心亭と、彼が建築した熱海の日向氏別邸について論じる。(2) では、医学者エルヴィン・ベルツによる温泉や日本の武道についての研究と実践を考察する。(3) では、北関東の産業の発達に与えたドイツの影響について考える。(4) では、那須野が原の開墾とドイツの貴族文化の関係を検討する。(5) では、ドイツの飛行船ツェッペリン伯号とリンドバーグの日本来訪を論じる。(6) では、「カスバル流外科」の系譜を分析する。(7) では、林学者の本多静六の生涯を紹介する。(8) では、獨協大学とドイツ宰相ミヒャエリスについて論じる。

Comprehensive Research about German-related Historical Sites in North Kanto

OBARA, Jun

Abstract

Many historical sites related to German history exist in Japan. I have already identified more than 1,000 that include, scenic spots, buildings, museums, archives, collections, and monuments. In this paper, I choose eight topics German-related historical sites in the north Kanto area (Gunma-, Tochigi-, Ibaraki-, Saitama- prefecture) and explain their historical background.

In the section (1), the architect Bruno Taut's Senshin-Tei in Takasaki and Mr. Hyuga's Villa in Atami, which he built, are discussed. The section (2) examines the research and practice of Erwin Bälz on hot springs and Japanese martial arts. In the section (3), I discuss the German influence on the development of industry in north Kanto. In the section (4), the relationship between the cultivation of Nasunogahara and German aristocratic culture will be examined. In the section (5), I investigate the LZ 127 Graf Zeppelin and Charles Lindbergh's visits to Japan. In the section (6), the genealogy of Caspar's style of surgery will be analyzed. In the section (7), the life of Seiroku Honda, a forestry scientist, will be introduced. In the section (8), I focus on Dokkyo University and the German Chancellor Georg Michaelis.

I. はじめに

日独関係史に関する研究には相当な蓄積があり、とくに日独通交 150 周年にあたる 2011 年前後から重要な研究成果の発表が続いている⁽¹⁾。しかし、両者の交流を「地域」から、政治、経済、社会、文化の各分野にまたがる総合的な視野をもって検討した

ものは未だない。その原因でもあり結果でもあるのが、日独関係史に関わる三つの研究分野、すなわち各地の研究・教育機関や郷土史家による個別的な地域研究、日本という自己と異国という他者の二分論的な構図の克服が課題とされるべき日本史研究、外国史研究の一部という自己規定にとらわれがちなドイツ史研究の間に横たわる懸隔である。日本各地に

残るドイツ史関連の史跡・史実を拾い上げ、それらを結び合わせて日独交流の総体的な姿の再構成を試みることに、その際に地域研究、日本史研究、ドイツ史研究それぞれの知見の統合を目指すことは、日独関係史のさらなる深化に繋がろう。筆者はそうした観点から、これまでに北海道、東北、関東南部に関する考察を行った⁽²⁾。本稿では、群馬県、栃木県、茨城県、埼玉県に存する関連史跡のうち、八つの事例を取り上げる。

本研究の基本的視点については既に別のところで説明しているため⁽³⁾、ここでは要点をごく簡単に列挙するにとどめる。まず本研究では、対象を現在のドイツ連邦共和国に属する地域に限定せず、オーストリア、東欧地域、スイス、さらにはバルト・ドイツ人、アメリカに渡ったドイツ人移民等も扱う。次に、本論文では関連史跡・史実の一覧を最後に掲載し、そのなかでも、史跡の保存状態が比較的良好であること、文字史料が一定程度残されていること、ドイツ史研究者や日本史研究者のあいだで詳細が周知されているとはいいがたく、今後さらなる検討が必要であること、単なる「奇談」の類ではなく、日独関係史の再考に結びつくような問題を含んでいることといった諸要件を満たしているものについて本文で詳論する。また、紙幅の都合から史料、参考文献への言及は最小限にとどめる。日付は陽暦で表す。

II. 関東北部に存する史跡・史実

(1) タウトの住んだ家、建てた家⁽⁴⁾

別稿で既にふれたように、建築家タウト (Bruno Taut 1880-1938) は1933年5月から1936年10月

まで日本に滞在し、仙台や高崎で暮らした⁽⁵⁾。彼は1934年8月から離日するまでの2年間、群馬県高崎市の達磨寺境内に建つ六畳と四畳半の二間からなる和風家屋、洗心亭に住んだ。洗心亭は元々は東京帝大教授の佐藤寛次 (1879-1967) の別荘だったが、高崎出身の実業家である井上房一郎 (1898-1993) の世話で、タウトと秘書エリカ (Erica Wittich 1893-1975) の寓居となった。

タウトは県の工業試験場である群馬県工芸所で指導にあたった。ここで試作された彼の作品は、高崎周辺に住む手工業者たちの手を経て、タウトの最大の後援者であった井上が西銀座に開いた工芸店「ミラテス」で販売された。ハプスブルク帝国出身の建築家で日本各地に作品を残したレーモンド (Antonin Raymond 1888-1976) もこの店を訪れ、井上と交友している。

高崎には世界的な建築家を招くにふさわしい文化的環境があった。井上は学生時代から文化活動に傾倒しており、同郷の政治学者である蠟山政道 (1895-1980) や後に高崎市長となる住谷啓三郎 (1897-1975) とともに高崎新人会を結成し、吉野作造 (1877-1933) や大山郁夫 (1880-1955) を招いて講演会を開催するなどしていた。早稲田大学中退後、フランスに8年間留学して美術を学び、実家の建設会社、井上工業に入社、後に社長となる。なお、同社にはタウト滞日中に田中角栄 (1918-93) が在籍しており、井上は田中の支援者としても知られる。戦後も高崎市民オーケストラ (後の群馬交響楽団) の創設や、群馬音楽センター、群馬県立美術館の設立等にも貢献した。滞日中のタウトを世話し、彼と

(1) 例えば、工藤章、田嶋信雄編『日独関係史』全三巻、東京大学出版会、2008年；Curt-Engelhorn-Stiftung für die Reiss-Engelhorn-Museen, Verband der Deutsch-Japanischen Gesellschaften (Hg.) *Ferne Gefährten. 150 Jahre deutsch-japanische Beziehungen*, Regensburg 2011；日独交流史編集委員会編『日独交流 150年の軌跡』雄松堂書店、2013年；工藤章、田嶋信雄編『戦後日独関係史』東京大学出版会、2014年；国立歴史民俗博物館・2015年度企画展示「ドイツと日本を結ぶもの一日独修好 150年の歴史」(2015年7月7日～9月6日開催)；田嶋信雄、工藤章編『ドイツと東アジア 1890～1945』東京大学出版会、2017年。

(2) 小原淳「北海道に存するドイツ関連史跡の総合的検討—日独関係史の再検討に向けて」『WASEDA RILAS JOURNAL』8、2020年；同「東北に存するドイツ関連史跡の総合的検討」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』66、2021年予定；同「関東南部に存するドイツ関連史跡の総合的検討」『西洋史論叢』42、2021年。

(3) 小原淳「北海道に存するドイツ関連史跡の総合的検討」を参照。

(4) ブルーノ・タウト、篠田英雄訳『日本—タウトの日記』全3巻、岩波書店、1975年；黒澤明『全集黒澤明』第1巻、岩波書店1987年；山口昌男『内田魯庵山脈』上下、岩波書店、2010年；田中辰明『ブルーノ・タウトと建築・芸術・社会』東海大学出版会、2014年；齊藤理「日本文化を読み解く3つの部屋—旧日向別邸にみるタウト作品のインターカルチュラルリティ」『インターカルチュラル：日本国際文化学会年報』16、2018年；国立近現代建築資料館『吉田鉄郎の近代—モダニズムと伝統の架け橋』文化庁、2019年。

(5) 小原淳「東北に存するドイツ関連史跡の総合的検討」を参照。

最も深く付き合い合った建築家の上野伊三郎（1892-1972）は、オーストリア人妻のリチ（Felice Rix-Ueno 1893-1967）とともに、1936年5月から39年3月まで高崎の群馬県工芸所に勤務し、所長を務めた。1923～27年にドイツに留学し、タウト来日に尽力した建築家の久米権九郎（1895-1965）は、やはり著名な建築家であった父の民之助（1861-1931）が沼田の出身だったことから群馬に人脈があり、井上にタウトを引き合わせた。彼らの他にも、柳宗悦（1889-1961）やリーチ（Bernard H. Leach 1887-1979）、ロシア人芸術家のブブノワ（Varvara Bubnova 1886-1983）といった芸術家たちが洗心亭を訪問して、タウトを中心とした知的コネクションを形成している。

直接の交流はなかったが、黒澤明（1910-98）もタウト、そして高崎の洗心亭に縁をもつ。黒澤の映画監督としての第一作は1943年上演の「椿三十郎」だが、彼はその二年前に「達磨寺のドイツ人」と題した脚本を書いている。映画化されることのなかったこの作品の主人公、達磨寺に住む老齢のドイツ人建築家ルドウィッヒ・ランゲのモデルはタウトである。

東北や日本海側を訪れて故郷の東プロイセンや北ドイツを追想したタウトは、洗心亭と周辺の土地を、青年時代を過ごしたベルリン郊外の村コリーンに重ね合わせて愛着を示し、1934年8月28日の日記に「此处こそ私が去りがてに思った最初の土地」と記している。事実婚の関係にあったエリカは1939年9月に再来日し、前年にイスタンブールで客死したタウトの遺稿や遺品、デスマスクを達磨寺に納め、一周忌の法要を営んだ。現在、敷地内には「ICH LIEBE JAPANISCHE KULTUR / 24.8.1934 / Bruno Taut」と書かれた石碑が建つ。

しかし、タウトは洗心亭で手放しの幸福と安閑に浸っていたわけではない。彼は離日間近の1936年6月1日の日記に、「私はもう日本に倦怠している。それだけにまた日本に対する判断が公正を欠くことのないように用心しなければならない。実際、日本という国は美しいし、この国の人達も概ね親切である。それにも拘らず、私は日本滞在によってなにを得たろうか、という自問を発せざるを得ない。私はもう多くの日本人から忘れ去られたのではあるまいか」、「いずれにせよ在りようは、私が少林寺〔達磨寺のこと：引用者〕で、三年前よりももっと寂寥を

感じているということだ。この三年間に私は、日本という国をかなりよく知り得た。しかし今ではこれ以上日本を知りたいとは思わない」と記している。ここには、50代半ばの円熟期に本業の建築で完全燃焼できなかったタウトの、静穏な生活のなかの孤独と苦悩、「親切」で「美しい」日本に対する懐疑と落胆が表れている。

滞日中に建築の仕事に恵まれなかったタウトだが、日本に唯一現存する作品として、熱海の日向氏別邸がある。実業家の日向利兵衛（1874-1939）は1935年4月の銀座の「ミラテス」でタウトがデザインした電気スタンドを購入して、彼の仕事に関心をもった。当時のタウトは、東京世田谷の等々力にジードルング（集合住宅）を建築する計画をもちかけられたものの3月24日に破談になったばかりで、日向から別荘建築を依頼されると、「何もかもというわけにはいかないが、日向氏と私とは趣味の点で非常によく一致するところがあるので、今度の増築計画は順調に運びそうな気がする」と、4月16日付の日記に書いている。

5月7日、タウトは設計に着手し、7月13日から9月9日まで、日向が用意してくれた熱海上多賀の民家で設計監理を行った。担当したのは、海に面した斜崖に建つ別荘の半地下室である。建物全体の建築には渡辺仁（1887-1973）が関わり、タウトの設計部分については吉田鉄郎（1894-1956）や水原徳言（1911-2009）が助力した。吉田は、ドイツ表現主義に学ぶだけでなく日本建築をドイツ語圏に紹介した建築家である。また、日本におけるタウトの唯一の弟子とされる水原は高崎藩士の家の出身で、高崎の都市計画や建築に足跡を残した。

日向邸が完成したのは、トルコ移住の話がまとまる10日前の1936年9月20日のことである。タウトは社交室、洋風の居間、和風の座敷と縁側の三つから構成された作品の出来栄に満足して、「全体として明快厳密」と自賛している。彼自身は、並列された三つの空間をそれぞれ「ベートーヴェン、モーツァルト、バッハ」になぞらえているが、独特の雰囲気をもつこの建築をめぐる解釈は様々で、近年では、各空間が「民家」、「民芸」、「民俗」の世界を表現していると捉え、ドイツ・フェルキッシュ思想との親和性を見出す研究もある⁽⁶⁾。そうした主張のドイツ思想史に関する分析に疑問がないわけではないが、このタウト作品に多様な解釈の余地がある

こと、解釈にあたって日独双方の思想と歴史についての理解が求められることは同意する他ない。

(2) ベルツ、温泉、武道⁽⁷⁾

お雇い外国人ベルツ (Erwin v. Bälz 1849-1913) は29年間に及ぶ日本滞在中に、本業である東京医学校(後の東京大学医学部)での教育や宮内省侍医の職務以外にも、化粧水「ベルツ水」の処方、葉山御用邸造営への助言、ツツガムシ病の研究、蒙古斑の発見、アイヌに関する人類学的研究、狐憑きについての考察、美術品蒐集、日本論の執筆、日本文化のドイツへの紹介等、多分野で活躍した。

ベルツの功績の一つとして見逃せないのが、日本の温泉文化の発展に対する貢献である。長い伝統をもつ日本の温泉に注目した来日ドイツ人はベルツ以前からおり、早くも1827年には、シーボルト (Philipp Fr. v. Siebold 1796-1866) の助手のビュルガー (Heinrich Bürger 1804/1806-58) が雲仙や嬉野、武雄といった九州各地の温泉を周り、その医学的な効果を調査している。明治になって司薬場が東京、京都、大阪、長崎、横浜に設置されると、東京司薬場教師のドイツ人薬学者マルティン (Georg Martin 生没年不詳) が熱海、箱根等の鉱泉分析を行った。

1876年に来日したベルツも草津や伊香保、熱海、箱根に足を運ぶようになり、温泉に関する論文を日独両国で発表した。その一つで、内務省衛生局に提出した建白書を翻訳した『日本鉱泉論』(1880)は、日本をドイツやオーストリアと並ぶ温泉大国と称しつつ、しかし医学的な面での整備の遅れや、ビジネス面での活用の不十分さを指摘する。そして、ドイツの温泉は王侯貴族の保養地、国内有数の華美な場所であるのに対して、日本の温泉が山奥にあって寂

れていることを慨嘆し、伊香保を例に、浴療・飲療・気候療法の実践、効能の化学的分析、温泉医の育成、交通や施設の整備、飲食の提供、温泉を管理する委員の設置、芸妓の禁止、経営の合理化、官民の協働の必要を主張、今後の日本の温泉のあり方を説いている。

官版で刊行された同論文は、温泉の近代化に向けた専門家の提言として読まれるとともに、西洋人医学者のお墨付きとして、伊香保の温泉業者によって観光客向けの宣伝に利用され、温泉地の活性化に寄与した。ベルツのこうした働きもあって、『日本鉱泉論』出版の翌年にフランクフルトで開催された万国鉱泉博覧会、また1911年にドレスデンで開催された万国衛生博覧会では日本の温泉に関する展示物が出展され、その知名度が国際的にも高まることとなる。ベルツはさらに1890年には草津に6000坪の土地を購入し、本格的な保養地を建設しようと試みた。この計画は住民の反対にあって頓挫したが、その後もベルツは草津の時間浴をドイツに紹介するなどしており、1935年に草津の西の河原公園に顕彰碑が建立された。

ベルツは温泉のみならず日本の武術や武道の心身への効果にも関心を示し、日本滞在中に直心影流剣術や戸塚派楊心流柔術、講道館柔道を学び、帰国後は紹介に努めた。1907年11月16日には、ベルリンの軍事アカデミー大講堂でドイツ・アジア協会の会員を前に、日本文化の発展と日本人の国民性について講演し、会長を務めていた著名なプロイセン軍人、ゴルツ (Colmar v. d. Goltz 1843-1916) の賛同を得られたことを日記に書き残している。

ベルツは一面的な日本礼賛に陥ることはなかった。また、軍国主義の信奉者ではなかったし、ドイ

(6) 長谷川章『ブルーノ・タウト研究—ロマン主義から表現主義へ—世紀転換期ドイツのモダニズムと神秘主義』ブリュッケ、2017年。

(7) 国立衛生試験所編『国立衛生試験所百年史』国立衛生試験所、1975年；エルウィン・ベルツ、トク・ベルツ編、菅沼竜太郎訳『ベルツの日記』上下、岩波書店、1979年；安井広『ベルツの生涯—近代医学導入の父』思文閣出版、1995年；フェリックス・ショットレンダー、石橋長英訳『エルウィン・フォン・ベルツ—日本に於ける—ドイツ人医師の生涯と業績』大空社、1995年；エルウィン・ベルツ、若林操子監修、池上弘子訳『ベルツ日本再訪—草津・ピーティヒハイム遺稿/日記篇』東海大学出版会、2000年；エルウィン・ベルツ、若林操子・及川茂・池上弘子・山口静一・池上純一訳『ベルツ日本文化論集』東海大学出版会、2001年；関戸明子『近代ツーリズムと温泉』ナカニシヤ出版、2007年；澤村修治『天皇のリゾート—御用邸をめぐる近代史』図書新聞、2014年；関戸明子『草津温泉の社会史』青弓社、2018年；Kaiserlich-japanische Hygienische Untersuchungsanstalt, *Die Bade- und Luftkurorte Japans: Beschrieben für die Internationale Hygiene-Ausstellung zu Dresden, Tokyo 1911*; Erwin Bälz, Erwin Toku Bälz (Hg.), *Über die Todesverachtung der Japaner*, Stuttgart 1936 (原題は „Über den kriegerischen Geist und die Todesverachtung der Japaner”); Hans-Joachim Bieber, *SS und Samurai: deutsch-japanische Kulturbeziehungen 1933-1945*, München 2014; サーラ・スヴェン「ベルツ博士が日本とドイツにもたらしたもの」(<https://www.nippon.com/ja/column/g00044/>、2020年9月26日閲覧)。

ツ・トゥルネンに対するスウェーデン体操の優越を認めているように（1907年9月18日付の日記）、ドイツ文化の至上性を掲げる国粹主義からも遠かった。しかし、日露戦争が勃発した1904年に彼がドイツの新聞に発表した「日本人の戦士精神、そして死の軽視について」という小論は、『日本人の死の軽視について』という略題でナチ政権下の1936年に出版、1942年にも再版され、日本の「サムライ精神」とナチズムの共通性を説く主張に利用されてしまった。

日本をよく知り、ドイツに日本を、日本にドイツをよく伝えて、自国で「日本人」と渾名されたベルツの語りが秀逸なのは、熱い知的好奇心と冷めた客観性の均衡が保たれているからである。ベルツの再評価には、彼が日本に向けたのと同様の冷静で公平なまなざしが求められる。

(3) 北関東の殖産興業⁽⁸⁾

工業部門で招聘されたお雇い外国人はイギリス出身者が多数を占めており、民間企業の進出という点でもイギリスの優位は否めない。しかしドイツ人も随所に痕跡を残しており、北関東地域に限っても、幾つかの重要な事例を挙げることができる。

最初期の例としては、フランス式の富岡製糸場（1872）に先行して1870年に操業を開始した日本初の器械製糸工場、藩営前橋製糸所がある。同工場を創設した速水堅曹（1839-1913）は川越藩士の三男に生まれたが、27歳の時に藩主の移封に従って前橋藩士となり、藩財政の補強のために設けられた藩営の生糸売込店「敷島屋」の主任の座に就いた。そこで彼は低質な日本製生糸の国際市価がフランス製やイタリア製の半値程度に過ぎないことを知り、品質の向上、生産の増大の方途を模索するようになった。速水は横浜のスイス系商社、シイベル & ブレンワルド商会（現在のDKSH ジャパン社）のスイス人技師ミュラー（Casper Müller 1835-?）を招き、木製機械12台を導入して藩営工場を創業した。この前橋製糸所は廃藩置県によって県営にな

り、さらに1873年に小野組に払い下げられ、1898年まで操業した。速水はここでの経験を買われて富岡製糸場の所長となり、その後も活躍を続けた。なお、1876年に横浜から輸出された生糸646トンの取り扱い量の割合は、フランス系商社12%、イギリス系10%、ドイツ系9%、スイス系18%であり、ドイツやスイスが一定のシェアを占めていたことが分かる。

高崎の新町紡績所もドイツの影響を受けている。同工場は、屑糸や屑繭から絹糸を作るために1877年に設置された官営工場で、養蚕技術者の佐々木長淳（1830-1916）がウィーン万博を視察した経験をもとに工場建設を指揮し、クレーフェルト出身の技師グレーフェン（Georg A. Greeven 1843-98）が佐々木を補佐した。工場の設備はスイスとドイツから導入された。なお、佐々木の息子の忠次郎（1857-1938）は東京大学養蚕学教室の初代教授となった。

栃木県下都賀郡野木町と埼玉県深谷市に残る Hoffman 窯は、ドイツの技師 Hoffman（Friedrich E. Hoffmann 1818-1900）が考案した煉瓦窯の遺構であり、ともに重要文化財に指定されている。前者は1888年に設立された下野煉化製造会社の設備で、ここで作られた煉瓦は東京駅や日光金谷ホテル、足尾銅山等の建築に利用された。後者は、ドイツ人建築家のエンデ（Hermann Ende 1829-1907）とベックマン（Wilhelm Böckmann 1832-1902）による日比谷への官庁集中計画を実現するために渋沢栄一（1840-1931）らが1887年に設立した会社、日本煉瓦製造の設備であった。工場が建設されたのは、渋沢の故郷である血洗島村の近くである。ブラジル生まれのドイツ人技師チーゼ（Nascentes Ziese 生没年不詳）が指導に当たり、東京駅、万世橋高架橋、司法省（現在の法務省旧本館）、日本銀行旧館、赤坂離宮、旧警視庁、旧三菱第二号館等の煉瓦を製造した。

古河市兵衛（1832-1903）と、彼が開発した足尾銅山もドイツと縁がある。青年時代の古河は小野組の番頭の養子となり、盛岡小野組で働いていた。小

(8) 嘉屋実編著『日立鉱山史』日本鉱業日立鉱業所、1952年；渋沢栄一伝記史料刊行会編・出版『渋沢栄一伝記資料集』全58巻、1955～65年；鮎川義介、愛蔵本刊行会編『百味筆筒—鮎川義介随筆集』愛蔵本刊行会、1964年；鉱山の歴史を記録する市民の会編『鉱山と市民—聞き語り日立鉱山の歴史』日上市役所、1988年；竹中亨『ジューメンスと明治日本』東海大学出版会、1991年；竹中亨『ジューメンス社の対日事業』（工藤章・田嶋信雄編『日独関係史 1890-1945』第1巻、東京大学出版会、2008年所収）；布施賢治『下級武士と幕末明治—川越・前橋藩の武術流派と士族授産』岩田書院、2006年；細田衛士『環境と経済の文明史』NTT出版、2010年。

野組が1871年に築地製糸所を設立し、先述の前橋製糸場等、各地の製糸場を傘下に収めると、古河は生糸の買い付けで頭角を現し、前橋での任期を終えたミュラーを築地製糸所に雇い入れて会社のさらなる発展を図った。1874年、政府が為替方の担保制度を強化したため小野組は破産するが、その対応にあたった古河は陸奥宗光（1844-97）や渋沢栄一の支援を得られるようになった。1877年、独立した古河は足尾銅山を買収して日本有数の銅山へと成長させ、さらに秋田の阿仁鉱山や院内鉱山等、日本各地の鉱山にも進出し、財閥を形成するに至る⁽⁹⁾。彼の足尾開発に協力した渋沢は、「古河は鉱山の事に関し殆んど神の如き智能があつて、その観るところに些かも過誤の無かつたものだ」と回想している。事業拡大の間に古河はドイツ・ジーメンス社との関係を深め、例えば足尾では、日本初の水力発電所の設置をはじめ、ジーメンス社が銅山の電化事業を一手に担うこととなる。1923年、古河電気工業とジーメンス社は発電機と電動機の国産製造のために合弁会社を設立し、「古河」と「ジーメンス」の頭文字をとって、「富士電機製造株式会社」という社名にした。同社は、現在の富士電機や富士通のルーツである。しかし、日独企業の提携による開発の陰で、足尾鉱毒事件や華人労務者問題が発生した事実は看過できない。

本節の最後に、茨城の日立鉱山を取り上げる。日立の赤沢銅山の開発は江戸初期から始まったが、鉱毒問題を解消できず、持続的な操業は実現しなかった。明治に入ってもしばらく状況は改善されなかったが、1900年に鉱業条例が改正されて外国人の参加が可能になり、翌年に横浜のドイツ系企業、ポイエス商会が銅山を買取ったところから、本格的な鉱山開発が始まる⁽¹⁰⁾。ポイエス商会のもとで、赤沢の銅産出量は年間約78.5トン（1903）にまで増大した。しかし、鉱毒問題や地元住民の反対が続き、赤字経営を脱却することはできなかった。こうした状況を打破したのが久原房之介（1869-1965）であ

る。小坂鉱山——ベルツと親交の深かったドイツ人技師ネッター（Curt A. Netto 1847-1909）が開発した——の所長を経験したことのある久原は、1905年に赤沢銅山を買収して日立鉱山と改名し、久原鉱業所を設立した。久原は小坂鉱山出身の技術者たちの力を借りながら、鉱山の電化や近隣住民との話し合いをつうじて鉱毒問題の解消に取り組み、後に久原財閥を成した。第一次世界大戦後、日立鉱山の経営は義兄の鮎川義介（1880-1967）に譲られる。日産コンツェルンを築いた鮎川は、ドイツ系ユダヤ人5万人の満洲移住計画、いわゆる河豚計画を立案したことや、1939年にヒトラー（Adolf Hitler 1889-1945）と会談したことでも知られる。

これらの事例からも窺えるように、企業や組織、地域や国境を越えるヒト、技術、資本の交流は工業発展の常態であり、来日ドイツ人たちの経済活動や技術協力を超域的に検討する余地はなお残されている。

(4) 元勲たちの那須⁽¹¹⁾

那珂川と箒川に挟まれた4万haの扇状地の那須野が原は、砂礫層が広がっているために保水力が弱く、とくに奥州街道より北側は、大部分が人の住めない荒野であった。明治に入り、栃木県の実業家である矢板武（1849-1922）と印南丈作（1831-88）らの粘り強い請願運動の甲斐あって、国費による那須野原疎水工事が実現し、1885年4月15日からの工事で総延長96キロの飲用水路、那須疎水が創り出された。

この事業と並行して、那須の開墾が始まった。1880年、三島通庸（1835-88）を中心に旧薩摩藩士らが結成した^{ちようこうしゃ}肇耕社に約1000ha、矢板と印南の経営する那須開墾社に約3000haの土地が払下げられ、翌年には大山巖（1842-1916）、西郷従道（1843-1902）、佐野常民（1823-1902）、青木周蔵（1844-1914）が、さらにその後も品川弥次郎（1843-1900）、平田東助（1849-1925）、山縣有朋（1838-1922）、

(9) 院内や阿仁、小坂でのドイツ技師の活動については、小原淳「東北に存するドイツ関連史跡の総合的検討」を参照。

(10) ドイツ人「リヒャルト・ポイエス」が経営する「ポイエス商会」は『日立鉱山史』をはじめ諸文献に登場するが、現時点では詳細を確認できなかった。さらなる調査を今後の課題としたい。

(11) 青木周蔵『青木周蔵自伝』平凡社、1970年；西那須野町『印南丈作・矢板武—那須野ヶ原開拓者の生涯』西那須野町、1981年；椿真智子「文化景観としての近代開拓市場—フロンティアにおけるモダニティの表象に関する一試論」『学芸地理』54、1999年；岡田義治『青木農場と青木周蔵那須別邸』随想舎、2001年；坂根義久『明治外交と青木周蔵』刀水書房、2003年；森川潤『青木周蔵—渡独前の修學歷』丸善出版、2018年；『那須野が原に農場を』那須野が原博物館、2018年。

毛利元敏 (1849-1908)、渡辺国武 (1846-1919)、戸田氏共 (1854-1936)、山田顕義 (1844-92)、渡辺千秋 (1843-1921)、松方正義 (1835-1924)、大久保利和 (1859-1945)、佐々木高行 (1830-1910)、野村靖 (1842-1909)、鍋島直大 (1846-1921)、細川潤次郎 (1834-1923) らが土地を購入し、農民を招いて農場経営に乗り出した。那須が原の開拓地は三分の二が華族農場となり、さらには、農場経営には関与しなかったものの、乃木希典 (1849-1912) もここに居を構えた。かつての不毛の地は様変わりし、大正末期には約 1000 戸、5400 人の移住者が那須野が原に住み着くようになった。

当初から「開墾、牧畜、植林」に主眼がおかれていた那須野が原は、概して水田率が低かった。表流水の使用が可能な笠松農場の水田率は 48%、安藤農場は 23% であったが両農場は小規模で、それに対して例えば那須野が原で二番目の面積を有する青木の大農場は、決して水利が悪いわけではないのに水田率は 0.5%、山林原野が 66.7%、牧場が 28.2%、畑地が 4.1% であった (1925)。こうした土地利用のあり方や、各農場に建てられた洋館の外観・内装には、洋風志向の強さが表れている。

那須野が原の農場の洋風趣味は、所有者の多くが洋行経験をもっていたことが理由の一端となっているのではないかと。彼らのなかには、ドイツに滞在した者も少なくなかった。例えば山縣は 1889 年の二度目の渡欧の際にビスマルク (Otto v. Bismarck-Schönhausen 1815-98) やヴィルヘルム二世 (Wilhelm II. 1859-1941) と面会し、グナイスト (Rudolf v. Gneist 1816-95) の個人教授を受けた経験をもつ。また、那須が原で最大の農場を保有し、「万歳閣」と呼ばれる洋館を構えた松方は、1902 年の欧米歴訪の際にヴィルヘルム二世に拝謁している。さらに煉瓦造りの洋館を建てた大山は 1884~85 年に欧州各国を視察し、山縣と連携しつつドイツ式の兵制を導入した。なお、大山は東京の自邸をドイツの古城風にしたことでも知られる。

しかし洋風趣味、ドイツ鼻根の点で群を抜くのは青木周蔵である。青木は長州藩留学生として 1868 年に渡独した折、ベルリンに向かう道中で仏独の軍隊の様子を観察し、前者の軟弱ぶりに対する後者の質朴強健、規律厳正な様子に強い印象を受ける。滞独中の 1873 年に外務省に入省し、1874~85 年、1892~98 年に駐独公使を務め、オーストリア=ハ

ンガリー (1875-80)、オランダ (1878-80、85)、デンマーク (1885)、ノルウェー (1885)、ベルギー (1892-98)、イギリス (1893-94) の公使も兼任した。帰国後は外務大臣 (1889-91、98-1900)、駐米大使 (1906-08)、枢密顧問官等を歴任しつつ、お雇い外国人の招致、政府要人への働きかけ、獨逸学協会、日本人学生のドイツ留学への支援等をつうじてドイツの文化や制度の移植に貢献した。三国干渉の際にはドイツを擁護して、外相の陸奥宗光と激しく対立している。

23 年に及ぶドイツ生活の間に日本人の先妻と離縁して、プロイセン貴族の娘エリーザベト (Elizabeth v. Rahde 1848-1931) と再婚した青木は、岩倉使節団に加わって渡欧してベルリン工科大学でエンデに学んだ建築家の松崎万長 (1858-1921) に依頼し、1888 年に那須に洋風の別邸を建て、田舎ユンカーよろしく狩りで捕えたシカの角で飾り立てた。また農場管理には (7) で後述する本多静六を起用し、針葉樹の樹間に落葉広葉樹を植林するドイツ式植林法を導入したとされる。(8) で扱うミヒャエリスによれば、青木はさらに洋風住宅の建築・販売、ヨーロッパ産のアカジカの日本への輸入、ヤマウズラの卵の販売といった事業も構想しており、ドイツ貴族風の農場生活を自分で実践するだけでなく、日本の上流社会に浸透させようと考えていた可能性も窺える。

青木は 1914 年 2 月 16 日、那須塩原で肺炎のため死没した。半年後に日独が第一次世界大戦で開戦することを知らずに済んだのは、幸せだったのかもしれない。

(5) 霞ヶ浦のツェッペリン¹²⁾

日本軍が経験した最初の航空戦は、ドイツに対する 1914 年 10 月 31 日~11 月 7 日の青島の戦いであり、その後、陸海軍による航空部隊の育成が本格化した。1922 年 11 月 1 日、陸上機と水上機の両方の訓練が可能な霞ヶ浦西岸の阿見原に、横須賀、佐世保に次ぐ三番目の大日本帝国海軍航空隊が開隊され、日本で最大規模の航空戦力の施設となった。1940 年には横須賀からここに予科練が移された。

現在、この場所は陸上自衛隊霞ヶ浦駐屯地や土浦駐屯地として使用されているが、敷地内に駐屯地の歴史を説明する広報センターがあり、建物の前にはドイツの飛行船、ツェッペリン伯号 (LZ127) を模

した碑が設けられている。

1928年7月に建造されたツェッペリン伯号は全長236.6m、ガス容積10万5000m³の当時世界最大の飛行船であり、60トンの荷重を運搬することができた。船内には折り畳み式の二段ベッドを備えた10室の客室に加え、ダンスも可能なサロンがあり、専属コックの作る料理やボーイのサービス、音楽を楽しめた。1928年10月に大西洋横断飛行を成功させてアメリカ市民から大歓迎を受けたツェッペリン伯号は、翌年に世界一周旅行に挑戦した。8月8日に停泊地のニュージャージー州レイクハーストを出発し、同月10日に建造の地であるドイツ最南部、ボーデン湖畔のフリードリクスハーフェンに到着した。ここで新聞記者の円地与四松（1895-1972）と北野吉内（1892-1956）、海軍少佐の藤吉直四郎（生没年不詳）も乗り込んで、15日に飛行を再開する。シベリア上空を越えて東進し、19日に東京や横浜の上空を周遊した後、午後6時3分、霞ヶ浦の基地に着陸した。日本滞在は23日までの四日間だったが、上野から土浦への臨時列車が運行されて30万人の観衆が押し寄せた。この飛行を指揮したツェッペリン飛行船会社社長のエッケナー（Hugo Eckener 1868-1954）以下の乗組員は東京で連日の歓待を受け、首相の濱口雄幸（1870-1931）とも会った。23日に霞ヶ浦を発ったツェッペリン伯号は、太平洋を横断して26日にロサンゼルス、29日に出発地のレイクハーストに到着し、21日5時間31分で世界一周を達成、喝采をもって迎えられた。

二年後、霞ヶ浦は空の来客に再び沸く。1927年に大西洋単独無着陸飛行を成功させたリンドバーグ（Charles A. Lindbergh 1902-74）と、妻のアン・モロー（Anne Morrow Lindbergh 1906-2001）の訪問である。1931年、パンアメリカン航空から北太平洋航路の調査飛行を依頼されたリンドバーグ夫妻は、水上機シリウス「チンミサトウク号」で7月27日ニューヨークを出発し、カナダ、アラスカ、アリューシャン列島、カムチャツカ、根室を経由して、8月26日14時10分に霞ヶ浦に降り立った。

二か月間の飛行体験はアン・モローが綴った『北方への旅』に詳しいが、夫妻は東京、大阪、福岡を訪れたのち南京、漢口（現在の武漢）へと飛び、航路を開いた。中国滞在中は、死者400万人とも言われる被害を出した1931年中国大洪水に遭遇し、調査・救援活動にあたった。

しかし、リンドバーグの栄光はこの頃が頂点だった。翌年三月に長男の誘拐・死亡事件が起こりスキャンダルとなったことも悲劇だが、ナチ政権下のドイツとの蜜月関係もリンドバーグの名誉を傷つけることとなる。1930年代のリンドバーグは軍の要請を受けて度々ドイツを訪れ、世界的な名声を活用してドイツ空軍の状況を調査した。例えば1936年には、ベルリン・テンペルホーフでドイツ空軍の爆撃機ユンカース52や旅客機ヒンデンプルク号（LZ129）を操縦したり、リヒトホーフ航空団の基地やハインケルの工場、デッサウの工場、アドラースホフの航空研究所等を視察することを許されている。しかしこうした活動をつうじて、リンドバーグはナチ体制との距離を危険なまでに縮めてしまった。リンドバーグは滞独中の7月28日、第一次大戦中にエースパイロットとして活躍したゲーリング（Hermann Göring 1893-1946）の公邸での昼食会に招かれて歓談し、また8月1日にはベルリン・オリンピックの開会式に列席した。実現はしなかったものの、アメリカ大使館付き武官のスミス少佐（Truman Smith 1893-1970）は当初、ヒトラーとリンドバーグの会見を予定しており、大使館の承認も得ていた。その後もリンドバーグは1938年までにドイツを6回訪問し、1938年にはゲーリングからドイツ勲章を授与された。

1939年に第二次世界大戦が開戦すると、リンドバーグは『リーダーズダイジェスト』や『アトランティック・マンスリー』、あるいはラジオ放送で参戦反対を訴え、1941年1月23日には連邦議会で演説して、ドイツとの中立条約締結を唱えた。彼の主張は対独強硬論者の批判的的となり、ついにはアメリカ陸軍航空隊での委任を解除されるに至る。太平

12) 円地与四松『空の驚異ツェッペリン』先進社、1929年；土浦市立博物館編・出版『夢の空へーツェッペリン伯号と初期航空機の時代 第4回特別展』1990年；アン・M・リンドバーグ、中川経子訳『ユニコーンを私に—1922-1928 アン・モロー・リンドバーグの日記と手紙』三好企画、1997年；アン・M・リンドバーグ、中村妙子訳『翼よ、北に』みすず書房、2002年；A・スコット・バーグ、広瀬順弘訳『リンドバーグ—空から来た男』上下、角川書店、2002年；Rolf Italiaander, *Ein Deutscher namens Eckener*, Konstanz 1981；Peter Kleinheins, Wolfgang Meighörner (Hg.), *Die großen Zeppeline: Die Geschichte des Luftschiffbaus*, Berlin, Heidelberg, New York 1997.

洋戦争中は50回の実働任務に就き、1944年7月28日にモルッカ諸島のセラム島上空で日本の戦闘機を撃墜しているが、あくまでも民間人としての勤務であり、軍隊への正式復帰は許されなかった。1945年5月には降伏後のドイツを視察し、ミッテルパウ＝ドーラ強制収容所を訪れてナチの蛮行に衝撃を受けている。

ドイツの飛行船のその後も不遇だった。ツェッペリン伯号は霞ヶ浦飛来後も北極圏やパレスチナ等で長距離飛行を成功させ、1937年に役割を終えるまでに3万4000人の乗客を乗せ、172万キロを航行した。しかし飛行機開発の進展に押されて飛行船は将来性を狭め、第二次大戦中の1940年には弾薬として使用するために解体され、軍に供出された。シベリアを越えてドイツと日本を結ぶ航路も、独ソ開戦以降絶たれることとなる。そして霞ヶ浦・土浦も多数の予科練卒業生を太平洋戦争中に失い、戦争末期には教育機関としての機能は麻痺した。県北部の天津（現在の北茨城市五浦海岸）からは1944年11月～1945年3月に風船爆弾が飛ばされ、アメリカへの空路は無差別爆撃兵器の軌道となってしまった。ツェッペリン伯号やリンドバークの偉業と、独米による重慶、ゲルニカ、ドレスデンでの無差別攻撃、広島と長崎での原爆投下との間にはわずか数年の時間しかない。

(6) 「カスバル流外科」の系譜¹³⁾

日本における近代西洋医学の本格的な導入は、オランダ人軍医のメーデルフォールト (Johannes P. v. Meerdervoort 1829-1908) が長崎奉行所西役所医学伝習所で指導を始めた1857年11月12日を嚆矢とする。しかし、それ以前から各地に西洋式の医学が伝授、受容、継承されていた。メーデルフォールトに先行する西洋人医師としては、ケンペル (Engelbert Kaempfer 1651-1716)、ツェンベリー (Carl P.

Thunberg 1743-1828)、シーボルト、モーニッケ (Otto Mohnike 1814-87) らの名が挙がるが、「カスバル流外科」の開祖、シャムベルガー (Caspar Schamberger 1623-1706) もその一人である。

ライプツィヒのワイン商人の家に生まれたシャムベルガーは、幼少期を三十年戦争の混乱のなかで過ごした。ペストによってライプツィヒ市民の五分の一が失われた1637年、13歳で外科医の見習いとなり、1640年に外科医の資格を得た。ドイツ、デンマーク、スウェーデン、オランダでの修行後、1643年にオランダ東インド会社の外科医となり、バタヴィアや台湾等での勤務を経て日本行きを命じられ、1649年8月7日に来日した。長崎到着間もなく、4人の日本人医師を相手に外科の授業を行ったシャムベルガーは、プレスケンス号事件の特使の一員として11月に江戸に上り、12月31日に到着した¹⁴⁾。江戸滞在中、小田原藩主で後に老中となる稲葉正則 (1623-96) らを治療したことで評判となり、幕府が2台の駕籠を往診用に与えることとなった。1650年11月に短期間長崎に戻ったものの、その後も江戸に滞在して診療にあたり、1651年4月まで江戸に滞在した。この間、鎖国令にふれたイエズス会宣教師キアラ (Giuseppe Chiara 1602-85) の取り調べを行った大目付井上政重 (1585-1661) に気に入られて、彼の屋敷に度々招かれるようになる。シャムベルガーの活動によって稲葉や井上は蘭方医学に関心を抱き、日本人医師に西洋医学を学ばせるようになり、また歴代の商館医による医学の教授、東インド会社からの医薬品や医学書の購入も行われるようになった。5月に長崎に戻ったシャムベルガーは11月1日に離日し、帰郷後は商人として成功を得た。長男のヨハン・クリスティアン (Johann Christian Schamberger 1667-1706) はライプツィヒ大学の学長、医学部長となり、解剖教室を設立するなどの功績をあげた。

13) 川島尚二『土井藩歴代蘭医河口家と河口信任』近代文芸社、1989年；ヴォルフガング・ミヒェル「日本におけるカスバル・シャムベルゲルの活動について」『日本医史学雑誌』41-1、1995年；ヴォルフガング・ミヒェル「カスバル・シャムベルゲルとカスバル流外科」上下、『日本医史学雑誌』42-3・42-4、1996年；古河歴史博物館編『日本の解剖ことはじめ—古河藩医河口信任とその系譜』古河歴史博物館、1998年；ヴォルフガング・ミヒェル「河口良庵による外科免許状（田中彌性園収蔵）とその背景について」『医譚』87、2008年；ヴォルフガング・ミヒェル著『慶安三、四年の日本における出島商館医シャムベルゲルの活動及び初期カスバル流外科について』九州大学大学院言語文化研究院・言語文化叢書18、2008年；ヴォルフガング・ミヒェル・鳥井裕美子・川島真人編『九州の蘭学—越境と交流』思文閣出版、2009年；Wolfgang Michel, *Von Leipzig nach Japan: Der Chirurg und Handelsmann Caspar Schamberger 1623-1706*, München 1999; Detlef Döring (Hg.), *Geschichte der Stadt Leipzig*, Bd. 2, Leipzig 2016.

14) 小原淳「東北に存するドイツ関連史跡の総合的検討」を参照。

シャムベルガーの日本滞在は2年余りに過ぎなかったが、出島の通詞猪俣伝兵衛(?-1664)、井上政重の侍医藤作(?-1654)、転びパテレンのポルトガル人宣教師フェレイラ(Cristóvão Ferreira(沢野忠庵)1580-1650)にも学んで「西流」を開いた西玄甫(?-1684)、唐津藩藩医の河口良庵(1629-87)がシャムベルガーに直接の教えを受けたものと思われる。とりわけ良庵は西洋医学の摂取に熱心で、シャムベルゲル以降の出島商館医の史料を収集・整理し、任地の京都や伊予国大洲で「カスパル流外科」——「カスパル」はシャムベルガーの名に由来する——の普及に尽くした。

良庵はシャムベルガーをはじめとする紅毛人からの知識・技術の継受を重視し強調したが、時とともに一門から西洋的色彩は失われていった。現存するカスパル流の免許状が神仏への起請文の形式をとっていることや、また教義の厳守を求める独自の神文も残っていることから、この流派がシャムベルガーの教えを日本的な要素で希釈し、また出島の商館医の伝授する医学とも異なる独自の路線を進んでいった様子が窺える。カスパル流はその後200年近く続き、これを一年学んだ華岡青洲(1760-1835)や彼の弟子たちも一応は門下に数えられる。しかし、青洲の外科術は開祖のそれとは比較にならないほどに高度であったし、彼が用いたシャムベルガーの膏薬はその他の流派でも活用されていて、カスパル流独自のものとは言えない。カスパル流外科は長い時間を経ていわば日本式西洋医学、和風蘭学の類に変質したと考えるべきであって、例えば杉田玄白(1733-1817)たちの『解体新書』(1774年)の出版や、メーデルフォールト以後の西洋史学の導入に直結させるべきではない。

しかし、紅毛医学と漢方医学を二分して、前者の系譜を単線的に遡ろうとする視点から離れれば、シャムベルガーに始まる流れが着実に受け継がれていったことを確認できる。すなわち、河口良庵の弟子で養子となった河口了閑(1644-1714)は京都で開業していたところを鳥羽藩主に召し抱えられ、後

に藩主に従って唐津藩に移って藩医を務めた。了閑の二代後の信任(1736-1811)は藩主に随行して唐津から下総国の古河藩に移り、1770年に日本で初めてとなる脳、眼球、頭部の腑分けを京都で行い、『解体新書』が世に出る二年前に、二十三図の解剖図を付した『解屍編』を刊行した。河口家からはさらに、信任の孫で杉田玄白の最晩年の弟子となり、古河で最初に種痘を行った信順(1793-1869)、東大医学部の前身である医学館の教授となった信寛(1829-1906)、その弟で、廃藩置県で古河藩が消滅した後、無償で種痘活動を行ったり伝染病対策に貢献した信久(1851-1919)らが活躍した。なお、幕末の古河藩からは「Jan Hendrik Daper」の蘭名を名乗った鷹見泉石(1785-1858)や、西洋式の顕微鏡で雪の結晶を観察して『雪華図説』を著した藩主土井利位(1789-1848)、バルツと親交のあった河鍋曉斎(1831-89)等の鬼才も出ている。

信任の『解屍編』をはじめとする河口家歴代の著書や医療器具、免許皆伝状、開業免状、施術簿、カルテ、ヒポクラテス図や神農図、医療器具等896件は、「河口家医学等関係資料」として古河市歴史博物館が所蔵している。ドイツ医学の最初期の受容と特異な継承のあり方を伝える貴重な史資料である。

(7) 本多静六の遺産¹⁵⁾

林学・造園学のパイオニアである本多静六(1866-1952)は、武蔵国埼玉郡河原井村(現在の埼玉県久喜市)に生まれた。少年時代に父を亡くして苦学を重ね、1890年に東京山林学校(1886年から東京農林学校、後の東京帝国大学農学部)を首席で卒業した。1890~92年にドイツに留学し、タラント林業学校(現在のドレスデン工科大学林学科)やミュンヘン大学に学ぶ。ミュンヘン時代には後藤新平(1857-1929)と知り合い、口八丁手八丁の後藤に振り回されながらも、指導教員の社会学者ブレンターノ(Lujo Brentano 1844-1931)を紹介したり、語学力向上の手助けをしてやった。これが縁で、後に後藤の依頼を受け、台湾の公園計画や東京復興計

15) 武田正三『本多静六伝』埼玉県立文化会館、1957年；白幡洋三郎「ドイツ都市公園の成立と展開—ドイツ都市公園の誕生まで」1・2『造園雑誌』43-1・43-3、1979年；白幡洋三郎『近代都市公園史の研究—欧化の系譜』思文閣出版、1995年；「明治23年洋行日誌」『本多静六通信』10、1998年；本多静六博士顕彰事業実行委員会編・出版『本多静六博士没五十年記念誌 日本林学界の巨星 本多静六の軌跡』、2002年；同編・出版『生誕百五十年記念誌 本多静六一森と公園を愛した人』、2017年；山口智「日比谷公園の成立」『Urban Study』38、2004年；遠山益『本多静六一日本の森林を育てた人』2006年、実業之日本社；本多静六、本多健一監修『新版 本多静六自伝 体験八十五年』実業之日本社、2016年。

画の素案作成に参加することともなった。

1893年にドイツから帰国した本多は母校の教員となり、1899年に日本初の林学博士号を取得した。大学での研究・教育と並行して全国各地の公園の設計に携わり、日比谷公園、明治神宮の森、北海道七飯町の大沼公園、釧路市の春採公園、会津若松の鶴ヶ城公園、水戸の偕楽園、前橋の敷島公園、さいたまの大宮公園、野田の清水公園、小諸懐古園、甲府の舞鶴城公園、愛知の岡崎公園、名古屋の鶴舞公園、金沢の卯辰公園、岐阜の養老公園、和歌山公園、箕面公園、下関の日和山公園、福岡の大濠公園等の数百の公園を手がけ、さらに奥多摩水源林や野辺地防雪原林、日本初の大学演習林である東京大学千葉演習林の育成、都市計画の作成、街路樹や屋敷林の造設、足尾銅山や別子銅山の鉱毒調査等も行った。

本多の膨大な仕事を一纏めにして説明することはできないが、随所にドイツの影響を確認できる。例えば日本初の洋式公園である日比谷公園は、プロイセンのコーニッツ（現在のポーランドのホイニツェ）の市営公園の運動場やベンゼン市立病院遊園等を参考にしているとされ、雲形池の設計もドレスデンの造園学校教授のベルトラム（Max Bertram 1816-77）の著作から借用したもので、現存する公園事務所もドイツ風である。設計当初は、不屈き者が花壇の花を持ち去ってしまうのではないかと、園内の池で入水自殺が起きるのではないかとといった懸念の声もあがったというが、将来の日本の公園はドイツのフォルクスガルテンのような民衆教化の場となるべきだと考えていた本多は反対意見を説き伏せ、公園文化の定着に身を捧げた。

他方で、本多の生家が鳩ヶ谷出身の宗教家小谷三志（1766-1841）が広めた富士講の一派、「不二道」を信仰・実践していたこと——祖父の折原友右衛門（生没年不詳）は小谷の高弟で、67回の富士登山を行った——を重視し、全国の学校における植樹活動の推奨、人の手によらず自然の力だけで「天然更新」する明治神宮の森づくり、第一次大戦後の平和記念

事業や皇紀二千六百年記念事業の際の記念植樹、関東大震災後の帝都復興事業といった本多の活動に、小谷の説いた日本的な実践道徳や自然論からの影響を見出す意見もある⁽¹⁶⁾。

本多の活動の旺盛ぶりは専門分野にとどまらず、公私双方にわたる。給料の四分の一を天引きして貯金にまわし、貯まった金を投資して大きな利益を得たが、財産を贅沢にあてたり自分の子孫に分け与えたりはしなかった。本多は1902年に渋沢栄一に協力を仰いで「埼玉学生誘掖会」を立ち上げ、埼玉出身の学生向けの寄宿舎と奨学金を創った。現在も本多の設立した基金をもとに、埼玉県が本多静六博士奨学金を設けている。また、退官を機に自身の有する秩父の山林8000余町歩を寄付し、これは東京大学の演習林や県有林として今に残った。家庭生活では、彰義隊の頭取を務めた本多晋（敏三郎、1845-1921）を父にもち、日本で四番目の公認女医となった妻の銚子（1864-1921）との間に三男四女をもうけた。子孫には学者や官僚、政治家が多数いる。

生涯をつうじて376冊の著作を書いた本多は、刻苦勉励、天職への没頭、儉約と蓄財、慈善と奉仕、公德心の重視、名利の忌避、理屈と人情の調和、心身両面の健康の追求、自然への愛着と崇敬といった徳目を推奨し、また自ら励行した。彼の人生は、日本とドイツで学んだ美德の最良の部分を実践で混合して勤勉に実践した、稀有な成功例に見える。

(8) 帝国宰相が教えた学校⁽¹⁷⁾

1881年に創設された獨逸学協会は、会長の北白川宮能久親王（1847-95）以下、井上馨（1836-1915）、西周（1829-97）、原敬（1856-1921）、品川弥二郎、桂太郎（1848-1913）、伊藤博文（1841-1909）、平田東助、加藤弘之（1836-1916）、青木周蔵、西郷従道、穂積陳重（1855-1926）、松方正義、山田顕義、山縣有朋、山脇玄（1849-1925）、井上毅（1844-95）、長與專齋（1838-1902）、モッセ（Albert Mosse 1846-1925）、レスラー（Hermann Roesler 1834-

(16) 岡本貴久子『記念植樹と日本近代—林学者本多静六の思想と事績』思文閣出版、2016年。

(17) 独協学園百年史編纂室『独協百年』全5巻、獨協学園百年史編纂委員会、1979～1981年；中井晶夫『ドイツ人とスイス人の戦争と平和—ミヒャエリスとニッポルト』1995年；堅田剛『独逸学協会と明治法制』木鐸社、1999年；ゲオルク・ミヒャエリス、堅田剛訳「〈独逸協会学校〉教師としてのゲオルク・ミヒャエリス—『国家と国民のために』より」1・2、『独協法学』64・65、2004～2005年；新宮謙治『獨逸学協会学校の研究』校倉書房、2007年；堅田智子「アレクサンダー・フォン・シーボルトと獨逸学協会学校」『獨協学園史資料センター研究年報』5・6、2014年；Bert Becker, Georg Michaelis. *Preußischer Beamter, Reichskanzler, christlicher Reformator 1857-1936: eine Biographie*, Paderborn 2007.

94)、ラートゲン (Karl Rathgen 1855-1921)、マイエット (Paul Mayet 1846-1920)、メッケル (Jacob Meckel 1842-1906)、テヒョー (Hermann Techow 1838-1909)、レーマン (Rudolf Lehmann 1842-1914) らが名を連ね、明治日本におけるドイツの学問・文化の輸入を推進した。この獨逸学協会によって1883年に開校されたのが、獨協中学校・高等学校の前身の獨逸学協会学校であり、初代学長を西周、第二代を桂太郎、第三代を加藤弘之が務めた。同校は普通科の上位の課程として専修科を設置し、ドイツ法学を専門的に学ぶ場としたが、この専修科は補助金の打ち切りによって維持できなくなり、1895年に帝国大学独法科へ移管された。1964年に埼玉県草加市に開校された獨協大学は、この専修科を自校のルーツと位置づけている。

獨逸学協会学校では、ドイツ語界の「三太郎」と呼ばれた大村仁太郎 (1863-1907)、山口小太郎 (1867-1917)、谷口秀太郎 (1863-1937) をはじめ、社会学者の権田保之助 (1887-1951)、音楽家の東儀鉄笛 (1869-1925)、体育学者の高島平三郎 (1865-1946)、マラソン選手として知られる金栗四三 (1891-1983) らが教壇に立った。また、ドイツ語圏からは、平和運動に身を捧げた国際法学者ニッポルト (Otfried Nippold 1864-1938)、普及福音教会の牧師シュピナー (Wilfried Spinner 1854-1918)、日本滞在40年に及ぶ語学教師ユンカー (Emil Junker 1864-1927)、従兄弟のエルンスト・デルブリュック (Ernst Delbrück 1858-1933) とフェリックス・デルブリュック (Felix Delbrück 1859-1924) らが教師として招かれた。エルンストの兄は著名な歴史家ハンス (Hans Delbrück 1848-1929) であり、またフェリックスの兄はプロイセン副首相のクレメンス (Clemens v. Delbrück 1856-1921) である。

こうした教師陣のなかに、第一次世界大戦中の苦難の時期にドイツ宰相を務めたミヒャエリス (Georg Michaelis 1857-1936) がいる。フリードリヒ大王 (Friedrich II. 1712-86) の下で初の市民出身の蔵相となった先祖をもつミヒャエリスは、シュレーゲンのハイナウに地方裁判所判事の次男として生まれたが、幼少期に父が早逝し、苦学の末に1879年にプロイセン官僚となった。1884年、司法試験にも合格してベルリン地方裁判所の検事補となり、間もなく先輩の判事から日本で法律学の教師として働く話を紹介されて訪日を決意する。なお、日

本で勤務するための条件の一つとして博士号を取得する必要があったが、ミヒャエリスはゲッティンゲン大学のイエーリング (Rudolf v. Jhering 1818-92) の著作の日本語訳を西周に斡旋する代わりに、面接のみで博士号を授与された。

ミヒャエリスは1885年に獨逸学協会学校に赴任し、1889年の帰国まで法学を講じ、教頭の職を務めた。彼は一方的な講義だけで済ませるのではなく、ゼミナール形式の授業で西洋と日本の法の比較を行ったり、模擬法廷を演じさせたり、実際の公判や刑務所を見学するなどして、私立学校から高等文官への道に進もうと志す学生を鍛えた。その甲斐あって、滞日中に50名の学生を卒業させた。またお雇い外国人の大方の例にもれず、本業の傍らで日本各地を巡り、日本人の社会をつぶさに観察し、青木周蔵をはじめとする日本の要人や在京のドイツ人たちと親しく交わっている。

帰国後のミヒャエリスは地方裁判所勤務を経て1892年から内務省に転じ、1909年にプロイセン財務省次官に就任した。第一次大戦中に食糧問題が深刻化するとプロイセンの民衆食糧国家委員会に所属して手腕を発揮し、名を知られるようになった。1917年7月14日、軍の意向を踏まえたヴィルヘルム二世によって帝国宰相に任命されるも、政治家としては手腕を発揮できず、10月24日 (プロイセン首相としては10月31日) に辞職を余儀なくされた。

短期間で潰えたミヒャエリス内閣には日本と縁のある閣僚が複数いる。法相のリスコ (Hermann Lisco 1850-1923) は、ベルリンで牧師をしていた父親が青木周蔵に洗礼を施したことが縁となって、青木からドイツ人教師の斡旋を依頼され、検事補時代のミヒャエリスに日本行きを勧めた人物である。また、植民地相のゾルフ (Wilhelm Solf 1862-1936) は1921~28年に駐日大使を務め、1927年の日独通商航海条約の成立に尽力し、獨逸学協会学校の運営にも貢献した。そして外相のツィンマーマン (Arthur Zimmermann 1864-1940) は、第一次世界大戦中の1917年1月16日に日本・ドイツ・メキシコの同盟を打診する、いわゆる「ツィンマーマン電報」を送付したことで知られる。

ミヒャエリスは第一次世界大戦後の1919年4月1日に政界を引退し、ブランデンブルクのザーロで社会奉仕活動に従事した。1922年5月8日、64歳の時、北京で開催された世界キリスト教学生会議へ

の参加に合わせて世界周遊旅行を行い、35年ぶりの来日を果たした。京都帝国大学で講演したり、大阪でヴァイマル共和国初代駐日大使となったゾルフとともに日独協会の催しに参加するなどしてから上京し、東京駅で獨逸学協会学校の教え子十数名と現役生徒たちの出迎えを受けた。急速な近代化を遂げた東京を見物し、高橋是清（1854-1936）首相や内田康哉（1865-1939）外相を訪問したミヒャエリスは、気管支炎にかかって一時入院するも回復し、6月22日にアメリカに向けて横浜を出港した。大正・ヴァイマル期の日独交流史的一幕だが、既に表舞台を降りた老政治家の来日にそれほどの政治的、社会的なインパクトはなかった。その二年後、獨逸学協会学校にも英語科が設置され、ドイツ一辺倒だった従来の校風は薄れていった。この変化は一つの学校だけのものではなく、ドイツの「教え子」を脱却した日本全体の時流であったと言える。

Ⅲ. おわりに

本稿では、関東北部に点在するドイツ史関連の史跡を八つのトピックに整理して論じた。あくまでも地域を限定した考察であるが、本稿を締めくくりにあたり、以下の点を述べておきたい。第一に、関東北部の四県に絞っても、ドイツ関連の史跡・史実は、建築、温泉文化、保養、工業、鉱業、農業、余暇、

軍事、国際交流、林業、都市計画、教育、医療等々、多岐にわたる分野で、また時代的にも江戸時代から昭和期までの長期に確認できる。第二に、本稿で扱った地域を閉じた空間と見なすのではなく、例えばタウトの場合は東北や東京、熱海、ベルツの場合は箱根や別府、カスパル流外科術の場合は長崎や京都といった具合に、他地域との関連を視野に入れる必要がある。第三に、関東北部の事例には、タウトと和風建築、ベルツと温泉や武道、江戸時代から続く鉱山への西洋式技術・経営の導入、那須における欧風農場、カスパル流外科術、本多静六の公園等、ドイツと日本の文化面での混交を示す事例が多い。これは偶然によるものではあるが、しかし結果的に、この地域は日独の文化交流の多様なあり方を考えるうえで格好の対象となっていよう。

1600年に日本に漂着したリーフデ号の一部であるエラスムス像（貨狄尊者）が伝来した栃木県佐野市の龍江院や、日本浪漫派の詩人・ドイツ文学者である神保光太郎（1905-90）の住居、生物学者アールブルク（Hermann Ahlburg 1850-78）が調査を行った筑波山、ドイツ科学の影響も強かった理化学研究所等、本稿で取り上げられなかった史跡はまだある。これらの検討は他日を期する。

・関東北部に存する日独関係の史跡一覧

史跡名	住所	備考
洗心亭	群馬県高崎市鼻高町 296 達磨寺	Ⅱ (1)に関連。
旧日向別邸	静岡県熱海市春日町 8-37	Ⅱ (1)に関連。
内村鑑三記念碑	群馬県高崎市宮元町 143 頼政神社	Ⅱ (1)に関連。水原徳言の作。
「ブルーノタウト設計 旧群馬工芸所の塀」	群馬県高崎市並榎町 130-2 高崎市勤労青少年ホーム	Ⅱ (1)に関連。群馬県工芸所の跡地。
県立群馬産業技術センター タウトの部屋	群馬県前橋市亀里町 884-1	Ⅱ (1)に関連。群馬工芸所の後継機関。
旧井上房一郎邸	群馬県高崎市八島町 82-1	Ⅱ (1)に関連。
群馬県立美術館	群馬県高崎市綿貫町 992-1 群馬の森公園内	Ⅱ (1)に関連。井上房一郎のコレクションを所蔵。
ベルツ記念館	群馬県吾妻郡草津町大字草津 3-9 道の駅草津運動茶屋公園	Ⅱ (2)に関連。
ベルツ先生記念碑、ベルツ・スクリバ像	群馬県吾妻郡草津町大字草津 521-3 西の河原公園	Ⅱ (2)に関連。
伊香保温泉湯元源泉のベルツ像	群馬県渋川市伊香保町伊香保湯本 581	Ⅱ (2)に関連。
ベルツとスクリバの胸像	東京都文京区本郷 7-3 東京大学内	Ⅱ (2)に関連。

ベルツ博士の供養塔	愛知県豊川市八幡町寺前7	II (2)に関連。
旧伊香保御用邸	群馬県渋川市伊香保町伊香保 群馬大学伊香保研修所	II (2)に関連。
葉山しおさい公園	神奈川県三浦郡葉山町一色 2123-1	II (2)に関連。葉山御用邸の附属邸の跡地。
マルチーノ公使・ベルツ博士記念碑	神奈川県三浦郡葉山町堀内 1025 森戸大明神	II (2)に関連。
小谷温泉大湯元山田旅館	長野県北安曇郡小谷村大字中土 18836	II (2)に関連。フランクフルトの万国鉱泉博覧会に関する展示物を所有。
野木ホフマン館、旧下野煉化製造会社煉瓦窯	栃木県下都賀郡野木町大字野渡 3324-1	II (3)に関連。重文。
煉瓦史料館、旧日本煉瓦製造ホフマン輪窯6号窯	埼玉県深谷市上敷免 28-11	II (3)に関連。重文。ホフマン窯は他に滋賀県近江八幡市旧中川煉瓦製造所、京都府舞鶴市旧神崎煉瓦にも残存。
藩営前橋製糸場跡	群馬県前橋市岩神町2	II (3)に関連。周辺に、前橋市住吉町一丁目の碑、研業社・関根製糸所跡、前橋生糸改所跡、前橋残影の碑、絹の橋、初代前橋市長『下村善太郎翁』、星野翁の碑、前橋ステーション跡、旧安田銀行担保倉庫、蚕糸記念館、群馬県立日本絹の里等。
富岡製糸場	群馬県富岡市富岡 1-1	II (3)に関連。
旧新町紡績所	群馬県高崎市新町	II (3)に関連。重文。
桐生市桐生新町	群馬県桐生市桐生新町	II (3)に関連。重要伝統的建造物群保存地区。近隣に桐生市近代化遺産絹摺記念館、桐生織物記念館、桐生織物参考館「紫」。
旧久原本部、鉱山資料館、日鉱記念館	茨城県日立市宮田町	II (3)に関連。
渋沢栄一記念館と誠之堂	埼玉県深谷市起会 110-1	II (3)に関連。近隣に渋沢栄一翁ふるさと館 OAK、埼玉県立深谷商業高等学校記念館。
渋沢史料館	東京都北区西ヶ原 2-16-1	II (3)に関連。
旧渋沢邸	青森県上北郡六戸町大字犬落瀬堀切沢古牧温泉渋沢公園	II (3)に関連。
古河足尾歴史館、足尾銅山	栃木県日光市足尾町松原 2825	II (3)に関連。近隣にドイツ・ハルコルト社製の古河橋(重文)、間藤水力発電所跡、古河掛水倶楽部、中国人殉難烈士慰霊塔。
田中正造記念館	群馬県館林市大手町 6-50	II (3)に関連。他に佐野厄除大師の墓所、田中正造生家跡、雲龍寺の墓所、栃木市藤岡歴史民俗資料館、田中霊祠、旧谷中村合同慰霊碑等。
石岡第一発電所	茨城県北茨城市中郷町石岡 17	II (3)に関連。スイス・エッシャー・ウイス製の横軸フランス水車を利用。重文。
池田記念室	静岡県沼津市宮本 140 富士通沼津工場内	II (3)に関連。
旧青木家那須別邸	栃木県那須塩原市青木 27	II (4)に関連。重文。
大山別邸	栃木県那須塩原市下永田 4-3-52 那須拓陽高校	II (4)に関連。近隣に墓所。
品川弥二郎の旧念仏庵	栃木県那須塩原市塩原 665	II (4)に関連。
乃木希典那須野旧宅	栃木県那須塩原市石林 820	II (4)に関連。近隣に乃木神社。

関東北部に存するドイツ関連史跡の総合的検討

松方別邸	栃木県那須塩原市千本松	II(4)に関連。
矢板武旧宅(矢板武記念館)	栃木県矢板市本町 15-3	II(4)に関連。
那須疏水	栃木県那須塩原市	II(4)に関連。重文。
山縣有朋記念館	栃木県矢板市上伊佐野 1022	II(4)に関連。古稀庵の洋館。伊東忠太の設計。
那須野が原博物館	栃木県那須塩原市三島 5-1	II(4)に関連。
陸上自衛隊宇都宮駐屯地防衛資料館	栃木県宇都宮市茂原 1-1-5-45	II(4)に関連。大山巖の関連資料を所蔵。
青木周蔵生誕地	山口県山陽小野田市植生字小植生	II(4)に関連。
飛行船飛来記念碑	茨城県土浦市右靍 2410 陸上自衛隊霞ヶ浦駐屯地関東補給処	II(5)に関連。広報センターに関連資料を展示。
雄翔館(予科練記念館)	茨城県稲敷郡阿見町大字青宿 121-1 陸上自衛隊土浦駐屯地	II(5)に関連。
予科練平和記念館	茨城県稲敷郡阿見町大字廻戸 5-1	II(5)に関連。
茨城県五浦海岸の「わすれじ平和の碑」	茨城県北茨城市平潟町	II(5)に関連。風船爆弾の基地跡。
青森県立三沢航空科学館	青森県三沢市大字三沢字北山 158	II(5)に関連。1931年に初の太平洋無着陸飛行を行ったミス・ビードル号のレプリカを展示。
東平尾公園博多の森球技場	福岡県福岡市博多区東平尾公園 2-1-1	II(5)に関連。1階エントランスにシリウスのレプリカ展示。福岡空港国際線ターミナルにも。東区名島にリンドバーク通り。
古河歴史博物館	茨城県古河市中央町 3-10-56	II(6)に関連。
河口信任屋敷跡	茨城県古河市錦町 7	II(6)に関連。
本多静六記念館	埼玉県久喜市菖蒲町新堀 38 菖蒲総合支所 5階	II(7)に関連。近隣に本多静六博士生誕地記念園、本多静六博士の森、久喜市立三箇小学校・本多静六資料室。
彩の国ふれあいの森(中津川県有林)	埼玉県秩父市中津川 447	II(7)に関連。本多が寄贈。埼玉県森林科学館がある。
野辺地防雪原林	青森県上北郡野辺地町字上小中野	II(7)に関連。本多の書による碑がある。
埼玉学生誘掖会砂土原寮跡地	東京都新宿区市谷砂土原町 3-21-2	II(7)に関連。
獨協歴史ギャラリー	埼玉県草加市学園町 1-1 獨協大学内	II(8)に関連。
ヒアシンスハウス	埼玉県さいたま市南区別所 4-12-10	神保光太郎の住居。
佐野市の龍江院	栃木県佐野市上羽田町 151	リーフデ号の船尾飾りである木造エラスムス立像(貨狄尊者)が伝来。佐野市郷土博物館がレプリカ所蔵。
理研ギャラリー	埼玉県和光市広沢 2-1 理化学研究所展示事務棟 1F	「理研の三太郎」等、多くの研究者がドイツ留学を経験。